
オオカミ少年

miu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オオカミ少年

【コード】

N0773H

【作者名】

miu

【あらすじ】

私達は両親も失い、友達も失った哀れな子供だった。でも、彼らにであってからは毎日が少しずつ輝き始めた。、オオカミ少年、それは、ただの夜遊びじゃなかった。

01 夜の管理人

深夜0時の鐘がこの街に響き渡る時、私達、オオカミ少年、は動き始める。

深夜0時の鐘が鳴ったとたん、全ての人間は眠りにつく。絶対に。でも私達は眠らない。オオカミ少年、だから。家族は一人もいない、孤独な子供が、オオカミ少年、となる。

私の両親も殺された。目の前で、何者かよくわからない、生き物、に。

その正体は未だ分かっていない。でも、私達が表の世界から隠そうとしている『夜の住人』と関係がありそうだった。

夜の住人とは狼男や猫娘、吸血鬼や雪女といったようないわゆる、妖怪、だ。

妖怪は深夜0時の鐘が鳴り終わるとどこからともなくふらっとやってくる。

私達は、妖怪、(夜の住人)の存在を一般市民に知られないように毎晩彼らの見張りをしている。

つまり、オオカミ少年、の正体は『夜の住人』の管理人ということだ。彼らを世間に知らされてはいけない。

人間に出会う確率はかなり低いが、時たま深夜0時の鐘が鳴っても眠りにつかない人間がいる。そんな人間を家に帰して記憶を忘れさせるのも、私達の仕事だ。

「樋野、よかった。今夜も来てたのか。」

「司か？」

「ああ。」

私達は正体がバレないように真っ黒のローブを着ている。このローブが、オオカミ少年、である証にもなる。

私は、オオカミ少年、になって2年目。かなりの人数になった。

それは、両親がいない子供が増えたということ。私達は仲間が増えてうれしいけど、現実ではかなり重要な問題になる。こんなに親がいない子供が増えたということは、きつとどこかでたくさんの方が死んだのであろう。

私の両親の謎の死も、未だに未解決のままだ。

「樋野、最近になって、オオカミ少年、」の数が急に増えたと思わないか？それから・・・妖怪の数も。」

「うん・・・。ここ2、3ヶ月はいつもの倍以上の人数になっている。オオカミ少年、」も、妖怪、」も。」

自己紹介が遅れたが、私の名前は樋野紗香。コイツの名前は中島司。私達は、同い年で、オオカミ少年、」になった時もコイツと一緒にだった。

「最近、いつも以上に夜歩きしている人間も増えてきている・・・。なんとかしなきゃね・・・。」

「・・・関係あると思わないか？全部が・・・。」
司の両親も私の親と同じように死んでしまった理由が未解決のままだ。

「それって、どういう意味？」

冷たい風が吹く中、私と司は教会の屋根の上にいる。十字架がそびえ立つ夜の教会は私達のとっておきの穴場だった。

「司、あんた何考えてんの・・・。」

司は黙ったままだ。そこからどこか遠くを見ている。私の存在を忘れていくかのように。

「・・・！人間・・・っ？」

司は私の話なんか無視して人間を見つけた。

「・・・あの子、裸足だ。」

「しかも、怪我してないか・・・あれ。」

よく見ると、確かに腕を押さえている。しかも大量の血が出ている。

「このままじゃ、吸血鬼が来ちゃう・・・。行くぞ樋野。」

「・・・はあ。」

ため息混じりで私と司は教会の屋根から飛び降りた。真つ黒な口ブが風に翻る。地上に着地すると、人間は怯えたような目で私達を見た。

「・・・だれ？」

女の子だった。肘からは血が服にまで滲んでいる。その匂いをいち早く察知した吸血鬼がビルの陰に潜んでいる。

「そこから動かないで。夜の街はとても危険なの。一刻も早く家に・・・」

その瞬間。

「・・・!!きゃあああ!!」

女の子は私ではなく、私の後ろの方を見て悲鳴をあげた。後ろを振り返ると、そこには一体の吸血鬼がいた。

「・・・吸血鬼、この人間を食ったら・・・殺す。」

司が脅す。すると吸血鬼は不気味に笑った。

「俺は、その小娘の血が欲しくて来たんじゃない・・・。」

不気味に笑う。すると、吸血鬼の白い腕が私の肩を力強く掴んだ。

その瞬間、私の肩からは血が滲み出てきた。

「・・・!!」

「やっぱり、お前からだ・・・。いつもいい匂いがしてたんだ・・・。」

寒気がした。私は格闘技全般ではいい成績を持っているが、このままだでは投げた瞬間に私の肩が引きちぎられる。

「司っ!その子をどこかにっ!」

司はすでに女の子を避難させていた。下手に動けば私の体が傷つくということに気づいているんだろう。一歩後ずさっている。

「吸血鬼、あんたっ・・・」

「黙っている、他の奴らが来る前に・・・」

そう言うと、私の肩をつかんでいた手が一瞬緩んだ。

「・・・くっ・・・!!」

その際に思いつきり吸血鬼を投げ飛ばした。

「・・・っつ！」

「吸血鬼、いい加減にしろ！人間に見られて困るのはあんた達でしょ！？」

そうして、私は吸血鬼に向かって説教を始めた。その説教は長々と続き、拳げ句の果てにはいろんなところからいろんな妖怪がやってきた。

「やーい、怒られてんの！だっせえ！」

この声はきつと狼男だろう。相変わらずガキっぽいんだから。

「るっせ！」

吸血鬼は狼男に向かってつばを飛ばした。

「ごるあ！つばを飛ばすな、不潔だろうが！」

私の怒鳴り声はこの街にいる、オオカミ少年、全員に聞こえていたらしい。周りを見ると、たくさんの私の仲間が私を上から覗いていた。

「大丈夫？！紗香！」

気づくと、私の心友、大野綾香、がいた。心配そうな顔でこつちを見ている。

「うう・・・。大丈夫です・・・。」

「紗香っ、あんた肩から血い出てんじゃないじゃん！大丈夫じゃないじゃん！」

綾香はパニックになっている。ハンカチを取り出して私の肩に巻き付ける。

「ったい！綾香、力つよい。」

「我慢して！あんた肩すんごいことになってるよ！？」

そこまで強く肩を掴んだのかあの吸血鬼は。本当、ちょっと呆れるわ。

綾香はハンカチを巻き終わると、その吸血鬼を見た。

「あんた・・・次ぎこんなことがあつたら本気で覚悟決めといてよ。」

綾香は、とつても怖かった。なぜか私は人に守られてばかりだ。

情けない。

私も人を守りたい。そう思ってた、オオカミ少年、になったのに、私は結局人に頼ってばかりだな。

「よ・・・怪我、どうだ？」

綾香が他の人間を見つけて避難させに行ってから、司が現れた。

「大丈夫だよ。それよりさ、あの女の子は大丈夫だった？」

「無傷だ。家にも帰った。もう夜には出歩くなと言っておいた。」

「りょーかい。ごめんね、全部任せちゃって。」

「お前、怪我してんだから当然だろ。早く治せよ・・・。俺達は同じバディなんだぞ。」

バディ、それは、オオカミ少年、として活動している時に自分のパートナーとなる人だ。

2人組で、大体が同期の人となる。綾香は私が、オオカミ少年、になる前にはもう、オオカミ少年、になっていた。

司とは同じ日にこの夜の世界にやって来た。私も司も最初はお互いのことを信じようとはしなかったけど、付き合いが長くなっていくほど、司の辛い過去が明らかになる。

「りょーかい。」

そう言っただけはローブの帽子をかぶった。そして、夜の街を司と一緒に駆け回った。

危険な夜遊び

「樋野、今日も遅刻か。いい加減に遅刻しないで学校に来たらどうなんだ？」

学校につくなり、私はいきなり委員長に説教をくらった。委員長と五十嵐 了は金持ちの息子でありプライドの固まりである。

私はそんな委員長が大っ嫌いだ。いちいち私に突っかかってくるし、毎日のように説教されているからだ。

「じゃあ5年後ぐらいには遅刻しないで学校に来るよ・・・。」
曖昧な返事でこの場をこまかし、私は素早く図書室に移動した。

「おい、樋野！」

委員長が何か言っていたが、私は完璧に無視してすたすた歩いた。

毎日のように図書館に通っているため、私はすっかり図書室のおじさんとは仲良しだ。

「おお・・・今日も来たのかい？」

「おはようございます、おじさん。」

「おはよう。」

このおじさんは、本当に『おじさん』というような雰囲気です、優しくて大きい手をしている。目の周りにあるしわが今まで生きてきたうれしいことも悲しいことも表しているようだった。

「またいつもの本の続きかい？」

「はい。」

おじさんは、あまりに私が図書館に通っているので、私の好きそうな本があるとそれを紹介してくれる。

私はそんなおじさんが学校の中で一番好きだった。

私がおじさんと仲良く話していると、あいつがやってきた。

「樋野、あとで保護者会の出欠表出しといってくれ。」

委員長はそれだけ言うつと図書館から出てった。

そうか、確かあったな。保護者会なんてのが。私の親は絶対に来れ

ない。

今は天にいたるのだから。私も、司も、綾香も保護者会があると毎回こんな思いをしている。

人の気も知らないで、まったくいい気なもんだよ。委員長は。

「今日おすすめの本はこれだよ。樋野さん。」

おじさんはそんな委員長のことをあまり気にせずいつものように本を紹介してくれた。

「この本の主人公はね、まるで君みたいな子なんだよ・・・樋野さん。」

おじさんは私の目を見ていった。

「私、みたいな子？」

「そう、図書館が大好きでその住人みたいな子。」

へえ・・・。本当だ、まるで私みたいな子。

「借りてもいいですか？」

「もちろん。」

私はその本を借りた。そして、その本を握って教室に行った。すると、教室では何かもめていた。

「だあかあらあ！今年の演劇祭は青春ものにしようよ！」

「いんや、恋愛でしょここは！」

教室の中で激しい冷戦が行われている。私はその場を避難しようとした。すると。

「樋野さん！あなたいつつもこんな時に逃げてんだから協力してよ！」

誰かがこんなことを言うもんだから、周りの子もそうだそうだとか言い出すし。

「・・・どっちでもいい。できるだけお金があんまりかからないほう。」

私は冷静に言った。すると、先生も私の意見に賛成した。結局今日中には青春か恋愛か決まらなく、明日のHRで決めるんだと。はあ、面倒くさい。

そして、そのことを夜になってから司に相談したら軽く笑われた。なぜだ、なにがおもしろい。

「お前、そこで金のこと考えるとか・・・おもしれえ奴だな。」

「こつちはそれなりに考えたんだけど。」

司はさつきからこつちの顔を見ようとしない。顔をそらして、きつと笑っているのだろう。

それがさらにむかつく。隠さなくたっていいのに。

「樋野が言つてた委員長つて奴は、そんなにお前にちよつかいだすのか？」

「うん。なんか、毎日突つかかってくるんだよね。うざい。」

すると司は「お前つて案外鈍いんだな」ってぼやいてたけど、私はそれを無視した。

「委員長は私のこと大っ嫌いだと思うけど。」

「はいはい。」

適当に言つて、司はまた顔をそらした。あ、また笑つてるな・・・。そんなことを考えながらぼーっとしていると、私は見つけてしまった、'人間'を。

「司、見つけた？」

司はすでに立ち上がっている。ローブの帽子を深くかぶり、顔が見えない状態になった。

「行くぞ。」

司はそれだけ言つと、私達がいた教会の屋根から飛び降りた。

私もそれに続いて飛び降りた。着地して、私達は人間のもとに走つていった。

「そのあなた。もう0時を過ぎてているわ、早く家に帰りなさい。」私が注意を促す。するとその人はくるりと振り向いた。性別は男だった。でもそれは、まるで人間ではなかった。

『俺は、頼まれたんだ・・・』

ガラガラの声、汚れきつた服、血色の指先。この人間は一体なんだ。

『オオカミ少年』を殺すように……。』
するとその男は隠し持っていたカッターナイフを取り出して私に襲いかかってきた。

(真っ正面から来る!)直感でそう感じて、私は横に転がった。
ナイフは私の髪の毛を何本か切っていた。

「お前は一体誰に俺達を殺すように頼まれたんだ!」

司が男に向かって質問をする。でもその男は今口がきけるほどの常識がない。

男は私に標的を絞り、さらに服の下に隠し持っていた何本もの果物ナイフを投げつけてくる。

私は転がるようにそのナイフをよけた。すると、記憶のどこかに同じような光景が浮かんだ。その瞬間、私の頭に激痛がはしった。

「……!!」

私は硬直した。すると、側にいた司が私の体を抱えた。

男はナイフを振り上げている。私は怖くて目を閉じた。

キンツ!と、何か不思議な音が聞こえた。目を開けると、そこには一体の吸血鬼がナイフを持って立っていた。

「こないだの詫び……。まだしてなかったから。」

吸血鬼はそう言った。

「あ、りがとう……。助かった……。」

私は体の全身から力が抜けていった。怖かった。本気で殺されるかと思った。

『何故俺の邪魔をする!同じ妖怪なのに!』

人間はそう言った。私と司は何を言ってるのかよく理解できなかったが、吸血鬼は大体のことは分かったのである。顔が驚きの表情を隠しきれていない。

「あなたは、人間じゃ……。」

言いかけたところで、吸血鬼がぼそつと言った。

「こいつは、死んだ妖怪の魂が取り付いている。なんとかしてやんないと。心は妖怪のものだが、体は人間のものだ。長くは保たない。」

そ、それって・・・。

「早くしないと、この人間が死ぬ。」
吸血鬼は残酷に言った。

02 新たな使命

「司、その人を殺しちゃだめ！」

今にも襲いそうな司を引き止め、私はその元人間を見た。目に正気はない。あるのは憎しみと憎悪だけ。

「あいつは、俺達を殺そうとしたんだぞ!？」

司はそれが許せないらしい。でも、私達は決して人間を傷つけてはいけない。

「あの人の家族はどうなるの!? 本人が殺された理由もわからないままお別れなんて絶対に嫌でしょ!」

そう言うと、司は黙った。その悲しみは、一番自分が知っているからである。

自分の親の死んでしまった理由がわからないまま永遠の別れをするというのは、想像以上に辛いことである。

「吸血鬼、あの人を人間にする方法はないの? あのまま一生妖怪に取り憑かれるの?」

すると吸血鬼はこう答えた。

「俺達妖怪は死んだあとに何かに取り憑けるとすれば取り憑ける・でも人間の体に直接乗り移るのは無理だ。」

「それって・・・どーゆー意味!？」

「あいつが身につけている物の何かに取り憑いてる。ってことか?」司が言った。たしかにそういうことだが、それを一体どうしろと。

「取り憑いてる物が体から一瞬でも離れれば、あの人間は正気を取り戻す。でも、取り憑いてた物は消えてしまうかもしれない。」

すると司は、元人間に近づいていった。そして、その人が着ていた背広を引き千切った。

「ええっ!? 司、どーした?」

でも、司の判断は正しかった。背広が無くなった瞬間、人間はぱつたりと倒れた。

「お……俺はつ何を……。」
人間は辺りを見渡した。あちこちに散らばるナイフ。引きつった私の顔。

「俺は……。」
そのまま人間は倒れてしまった。そのほうが都合いい。このあと、取り憑いていた妖怪をどうするか迷っていたところだ。

「あいつは、もう死んでいるんだ……。だから、早くこの札を奴に貼ってやれ。」

吸血鬼がふところから一枚のお札を取り出した。

「なにこれ……。」

「これは、妖怪を封じ込める……。または妖界に送る力があるんだ。」

妖怪の最後に行く世界は、一体どこに行くのだろうと考えたことがある。

それが妖界。

「速くしろ、他の物に取り憑いたらまた騒ぎになる。」

吸血鬼は私にそのお札を押し付けた。

「おいつなんで私!? あんた自身がやればいいじゃん!」

「俺はやりたくない。仲間をおくるなんて……。できない。」

吸血鬼は嫌そうに言った。目には悔しみの感情しかない。

私はお札を握りしめた。そして背広に取り憑いていた妖怪に向かって走り出した。

「司あ!どいてえっ!」

私はそう言って、お札を妖怪に向かって投げつけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0773h/>

オオカミ少年

2010年10月20日17時44分発行